

交流人事制度10年間の振り返り

—香川大学の交流人事における特色と全国の場合—

植田和也・大西えい子
池西郁広・谷本里都子

はじめに

平成15年度より実施された香川大学教育学部と香川県教育委員会との交流人事制度¹も10年が過ぎた。現在も3名の公立学校教員が大学教員(准教授)として原則3年間の勤務をしている。香川県で始まりその後全国多数の大学において、様々な形で本制度が取り入れられている。交流人事教員の交流会も今年度で第9回目²を開催できた。

本稿では、10年間の取り組みを振り返り、その間に派遣教員として学部での教員養成に関わってきた内容とそれに関する体制や改善点を中心にまとめる。特に、授業づくりにおいて、教職への意義を高めながら実践的指導力の向上を目指して工夫した点やその具体的内容、教員採用試験を通しての教職支援等について記載する。また、この制度が全国に広がり交流人事教員のネットワークが形成されてきた点についても若干紹介する。

1 平成15年当時の状況

香川大学教育学部と香川県教育委員会との交流人事制度により、平成15年4月から国立大学専任教員(当時は助教授)として3名が教育学部の学校教育基礎コースに教育実践領域を新設³して配属された。県教育委員会と大学の連携の一環⁴として、全国に先駆けての交流人事制度であり、実践的指導力を身に付けた即戦力となる人材確保を目指す県教委事務局と、学部生の資質向上や実践面の一層の強化を指向する大学側との思いが一致した画期的な人事であった。このような制度による、学校現場の一教員が形式退職の形をとり、いきなり大学教員として勤務することは全国でも初の試みであったという話題性から当時のマスコミ等からも好感を持って報道されていた。

交流人事に対しては、3年間の期間限定での派遣であったが、「教員養成における実践的指導力の育成を」、「教育現場の生の声を教員養成で」、「学校現場と大学の連携を」等、様々な期待がされた。つまり、この制度により教員養成の充実や新風を吹き込むこと、学校現場とのパイプ役が求められたといえる。

その後、本制度を取り入れた他大学では、実践センターへの所属となる大学が殆どであったが、香川大学では学部の一つの領域として位置付けられたことは大きな特徴である。また、研究室、研

植田和也 附属教育実践総合センター

大西えい子・池西郁広・谷本里都子 学校教育

究費や旅費の配分においては正規教員と同様の対応であり、予算は3名で教育実践として独立採算制とされた。このような所属や待遇も全国で初めてのため、その都度、協議しながら対応してきた。

特に、平成15年当時の率直な悩みとして、当時のことを交流人事教員交流会での発表原稿や植田(2007)^vでは、次のように記していた。

「研究室の存在が人との会話を少なくしている、情報の共有ができない、小・中学校とは違う様々なスタイルや文化が多くある、個人としての動きを互いが知らない、組織としての意識があまり感じられない、職員会や現職教育と教授会の違いに戸惑う、『教員をめざす学生』を育てる側の教員としてのモラルやマナーに少し疑問を感じることもある・・・」等である。そのような戸惑いと困惑の状況であったが、3名のうち1名は客員教授を経験していたことで、見通しや様々な予想を立てることができた。3名が月に1・2回定期的に情報交換と具体的な取り組みを検討しながら全て試行錯誤^{vi}で対応していた。

そして、今後何が出来るのか、この交流人事は果たして有効であるのか否かといったことを、現役学生への意識調査「現職教員による交流人事に対する学生の意識調査」を行い^{vii}、教員養成での実践に貢献してきた。当時の学生自身の意識については、阪根(2006)、植田(2007)、阪根・大西・植田(2006)を参照されたい。平成15年当時は、学生にも理解されていなかったが、授業や行事等において関わる際に話したり、授業の内容において学校現場での具体的な様子を取り入れたりすることで、交流人事教員としての役割や意義を学生にも伝えていこうとしていた。

2 香川大学教育学部における10年間の変遷

交流人事制度も11年目となるが、現在まで11名が勤務している。11年間の状況については図1のとおりである。性別で見ると、平成15年当時は男性3名で始まったが、5年目以降は女性の在籍も現在まで続いている。現在は、女性2名、男性1名であるが、11年間でみると男性7名、女性4名

香川大学の交流人事教員

	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	期間
1男	中	中	中	校長へ								3
2男	小	小	小	小	教頭へ							4
3男	中	中	中	中	中	他大学へ						5
4男				小	小	小	教頭へ					3
5女					小	小	小	指導主事				3
6男						中	中	中	中	校長へ		4
7男							小	他大学へ				1
8女								小	小	小	教頭へ	3
9女								小	小	小	小	
10男										小	小	
11女											中	

図1 11年間の交流人事制度による教員の変遷

	期 間	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21
A男	3年間							
B男	4年間							
C男	5年間							
D男	3年間							
E女	3年間							

図2 香川大学における交流人事教員の交代システム

である。次に、大学教員になるまでの校種の経験では、小学校経験7名、中学校経験4名であり小学校が多くなっている。平成15年当時は、中学校経験が2名で小学校経験が1名であった。平成24年度のみ、3名とも小学校経験者であったが、それ以外は小中経験者が常に在籍してきた。

また、大学へ勤務する前の職種で見ると、教諭から6名、教頭から3名、指導主事から1名、センター次長から1名であった。逆に、大学からの転出で学校現場へ戻る際には、校長として2名、教頭として3名、他大学の教員として2名、指導主事として1名である。

大学に勤務する任期については、当初3名が3年を終えた平成17年度末時点で一人ずつ交代するスライド方式をとったこと、任期途中で他大学へ出る教員がいたことなどで、平成25年3月までに大学での勤務を終えた8名を見ると3年間で4名、4年間で2名、5年間で1名、1年間で1名である。

この10年間に改善されてきたことも多々ある。例えば、当初は3名の研究室が全て別の棟であったが、現在は隣同士で設けられている。情報の共有や打合せ等においても大変重要なことである。

3 交流人事教員の円滑な引き継ぎ

(1) 任期と交代システム

香川大学教育学部が香川県教育委員会と3名の交流人事制度を維持してきた中で、本制度の円滑な継続には、任期と引き継ぎが重要な課題の一つでもあった。学校現場では新しい教育課題が次から次に起こり、教育課程や教育内容にも影響を与えている。そのような点からも、その時代にあった現場感覚をもった人を採用し、新鮮な生の学校現場の情報と実践をもって学生の前に立ち、教員養成に関わることが重要である。

そこで、香川大学に於いて平成17年度末にどのような交代を行ったのかを下図に示す。図2のように、3名が3年間を終えたが、一人ずつ交代するスライド方式を採用し引き継ぎを行えるシステムとした。つまり、平成17年度末にA男が3年間を終えて転出し、入れ替わりとして平成18年4月にD男が大学へ勤務することとなった。

(2) 授業等にかかわる引き継ぎ

植田(2007)は、交流人事教員が任期を終えて、交代する際の授業にかかわる引継ぎについて、交流人事4年目の当時以下のようにまとめている。

任期を終えた教員が担当していた授業や運営面での職務をどうすべきか検討し、いくつかの案を用意して、3月末に新しい教員も交えて話し合い、学務担当や講座の教員の意見も交えて決定していった。今後、そのようなことも含めて円滑な引き継ぎが大切であり、交流人事制度を継続するためのシステムを各大学の特色を生かしながら構築していくのが重要である。その際、システムに位置付けられる内容と新しく派遣された人に自由に任せられる枠を設定して、柔軟に対応することが求められる。

当初3年間で、授業体制として多様な形で実践に取り組み、学生にとってより実感もてる授業内容を求めてきた。その際に、筆者が関わってきた体制として、次のようなものがあった。例えば、TTによる算数教育法では、役割分担による授業構成の工夫と対話を大切にしてきた。コラボレーションによる生活科研究では、教員相互の共同創造型で多方向型の授業構成を目指してきた。また、オムニバス方式の学校教育課程論では、理論と実践の役割分担や多面的な評価を意識して取り組んできた。このような授業体制も引き継ぎの際に重要な点であったが、小学校と中学校の校種の違いや専門分野の違いもあり、全てをそのままスムーズに交代という理想を目指しながらも、柔軟に対応してきた。

その後、この引き継ぎについては少しずつ学部や構成メンバーの状況に応じて、よりよく変更してきた。現在は交流人事教員の申し合わせ事項として、下記のように定めて引き継ぐこととした。

「授業担当等における配慮事項と担当授業」

- 交流教員とともに3年間過ごす2年生の授業とタイアップした形での交流教員の授業や役割分担等をルーティン化する。(具体的な授業の担当は表1参照)
- 1年目の教員は、学校現場と大学との環境の違いやシステムに慣れるため、前期に学生との触れ合いが多い授業を担当するようにしている。また、1年目の前期には1人で15コマ全てを担当する授業はなく、複数教員で授業を担当することを原則とするⁱⁱⁱ。4月にはできるだけ授業時数が少なく、5、6、7月と少しずつ時数が増え、主となって授業を担当するようになっていくシステムとなるように配慮する。後期には1人で15コマを担当する授業もある。
- 授業役割分担表の作成で、来年度以降に担当する授業や役割分担等の見通しがもてるようになるメリットを生かしていく。

次の表1は、交流人事教員の授業分担表である。これを原則として、校種や当該年度の状況に応じて相談しながら決定している。これ以外にも、新規採用予定者の公立校インターンシップガイダンス等も引き受けて実施している。

表1 交流人事教員の授業役割分担表 (平成25年現在)

	科目名		A	B	C	○研究室で担当 その他は校種または年数	外部講師等		
			3年目	2年目	1年目		小	中	客
学部前期	教職概論(口)	月2	0	15	15	全(内2～3担当)、中学校	1	1	
	教育学演習1A	火2	0	0	5	15の内5 1年目			
	授業実践論A	火2	0	15	0	全、小学校			
	教育法規入門	火4	15	15	15	全、主で2～3担当、○			3
	学校教育課程論(A)	木3	2	6	0	15の内5、小学校	1	1	
	生活科研究(イ)	木4	0	0	15	全			
	教職の総合的研究	木5	3	3	3	全員で3			
	教育学演習ⅡA	金4	0	15	0	ゼミ(3年)			
	教育学演習ⅢA	金5	15	15	0	ゼミ(4年)			
	小学校英語指導法 [※]	月5	0	0	0	全(25年度より他へ)	1		
学部後期	教職概論(イ)	月1	1	1	1	各1、○			
	授業実践論B	火2	0	0	15	全、中学校			
	教育学演習ⅠB	火2	0	5	0	15の内5、2年目			
	生活科授業研究	火4	15	0	0	全、○	1		
	学校教育課程論(B)	木3	2	0	6	15の内2・6、主に中学校			
	生活科研究(ロ)	木4	15	0	0	全			
	教育学演習ⅡB	金4	0	15	0	ゼミ			
	教育学演習ⅢB	金5	15	15	0	ゼミ			
前	道德教育論(イ)	月4	0	1	2	15の内2、中学校	○	○	
	生徒指導論B	月3	0	0	1	15の内1、中学校		○	
後	道德教育論(ロ)	月3	0	1	2	15の内2、中学校			
	特別活動論(ロ)	木4	2	2	2	15の内各2、小・中、○			
前期	学校教育相談学B	月3	0	1	2	15の内1・2(中学校)			
	学校教育心理学(ハ)	木1	0	0	2	15の内2			
後期	学校教育心理学(イ)	月2	0	0	1	15の内1			
	学校教育相談学A	木4	2	1	0	15の内2・1			
院	教育実践基礎研究	前金5	4	4	4	15の内4(25年度)			
センター	教職実践演習(4年)		15	15	15	全、○			
	教育実践演習(3年)		1	2	0	教育実習事前事後指導			
	教育実践基礎演習		0	0	15	(フレンドシップ事業)宿泊実習			
	大学入門ゼミ(参観心構え)		1	1	0	各10分程度、1年生に、○			
	時数		108	149	121				

4 学内における活動

(1) 授業における工夫と役割～学校現場に根ざした授業の充実～

交流人事教員が主担当となって実施している科目には、「授業実践論A・B」「生活科授業研究」「教育法規入門」や、小学校の外国語活動について学ぶ「小学校英語指導法」がある。それぞれの授業で、学校の実践をふまえた授業を行ってきた。それ以外にも15回全てにかかわる授業として、「生活科



写真 香川大学で「秋探し」の引率実習



写真 町探検の引率実習

研究」「教職実践演習」「教職実践基礎演習(フレンドシップ)」等があるが、ここでは、平成25年度現在における「授業実践論A・B」「生活科授業研究」「教育法規入門」「教職概論」「教職実践演習」について概要を述べる^{*)}。

①「授業実践論A・B」の取り組み

「授業実践論」では、教員の専門研究分野を生かしたより実践的な学習を行っている。言語活動の充実を踏まえ、求められる基本的な授業づくり(話し方、板書のあり方、思考力や話し合う力の育て方等)を目指して指導案を作成し、模擬授業を実施するなど教科教育法にとらわれない授業を行っている。特に、Aでは小学校を中心に、Bでは中学校を中心にシラバスの内容を計画している。

②「生活科授業研究」の取り組み

「生活科授業研究」では、校外学習に焦点をあて、その際の教員としての留意点や教材研究、関係機関との連絡の取り方等を演習形式で学んだり、実際に引率実習したりする。今年度も、近隣公立小学校のご協力を得て、1年生の「公園での秋探し」、「香川大学での秋探し」、2年生の「町探検(図書館)4回分」という合計6回の引率実習と、1年生の「秋のおもちゃ大会」合計3回の授業参観の機会を得た。この活動を通して、教職の楽しさを実感する学生が多く、教育実習以外にも子どもたちと接する機会を意図的に設定する重要性を痛感している。授業後には、「校外学習に参加することで心に残る感動的なことを体験できたり、自分の行動を広げることができた。」「実践に近く、教師になることについて考えられた。教職に就くことに対し、不安の方が大きかったがこの授業でやっぱり先生っていいなと強く思った。」等の感想が見られた。特に、「生活科研究」や「生活科教育法」とは違い、子どもたちと直接触れ合えることを重視しながらも、教員としての支援や指導の視点を大切に構成し、具体的に教員の立場で生活科の授業イメージが描けるように工夫している。

③「教育法規入門」の取り組み

「教育法規入門」では、基本的な法規(教基法、学教法、免許法、教特法、地教行法、地公法など)及び答申・通知などについての理解を深め、法令遵守精神の高揚を図っている。特に、受講生は教員採用試験を受験する学生が殆どであり、教職員の実務に関わる問題を中心に、知っておかなければならない教育法規に対する理解を深めるとともに、具体的な事例や判例も取り上げる。客員教授にも現場の法規とケーススタディーということで講義をしていただき、実践的な判断力や行動力についても学べるようにしている。法規は交流人事教員で分担して解説を行っている。

- 教育基本法・・・C教員担当
- 学校教育法、学校教育法施行令、施行規則・・・A教員担当

- 教育公務員関係法規、教育関係の答申・通知等・・・B教員担当

④初年次教育「教職概論」の取り組み

全15コマ中の3コマを交流人事教員が受け持ち、1年生6クラスを2クラスずつに分けて授業を行う。どの授業も4人組でグループワークをし、話し合ったことをまとめて全体で発表を行うという形式で授業を構成した。交流人事教員3名で相談し、学生が経験から学べるように3つの授業で異なる方法でグループづくりを行った。授業内容は以下の通りである。

- 求められる教師像・・・C教員担当
- 教師の仕事(小学校編)・・・A教員担当
- 学校の仕組み・・・B教員担当

⑤「教職実践演習」の取り組み

「教職実践演習^{xi}」の計画段階の平成23年度から関わり、カリキュラムづくりにおいて、交流教員は特に「授業づくり」「学級経営」「生徒指導」について、講義・演習を担当して深く関わってきた。

ア：「授業づくり」の授業の概要：1校時(自己課題の明確化、班の課題の明確化、指導案と板書計画の作成)2校時(模擬授業、授業検討、全体意見交流)・・・A教員担当

イ：「学級経営」の授業の概要：1校時(学級経営に求められるもの、学級経営案や指導要録等の実際、学級開きまでの準備)2校時(学級開き、学級経営に資する子ども理解)・・・C教員担当

ウ：「生徒指導」の授業の概要：1校時(生徒指導の意義と課題、生徒指導の基盤となる児童生徒理解、望ましい人間関係づくり、学校全体で進める生徒指導)2校時(演習：アサーショントレーニング、集団指導の実際、問題行動への対応)・・・B教員担当

(2) 教職支援への関わり

①教員採用試験対策等の多様な支援^{xii}

大学入学から卒業まで学部生には、その学年や状況に応じて様々な悩みや不安があると思われる。例えば、各年次において次のような教職に関する不安や悩みが主に予想される。

1年次は、大学生活や授業への適応、2年次からの希望コースへの所属の実現不安(GPA)

2年次は、教職を目指すかどうかについての決断や迷い

3年次は、教育実習での授業や教員採用試験に向けての対策

4年次は、教員採用試験や卒業論文への迷いや不安

そのような不安や悩みを想定しながら、交流人事教員個人として次のような主に4点について支援や指導を臨機応変に行ってきた。

ア 教員採用試験対策等の多様な支援^{xiii}

イ 進路選択や進路の決定に関する個別相談

ウ 教員として必要な資質能力の開発や実践的指導力の養成(実地教育等での悩みや相談)

エ 学生同士の自主的な就職対策活動の支援(毎週月曜日夕方:教職自主サークルでの助言:後述)

特にアの多様な支援とは、具体的に「各講座やガイダンス・セミナー等への協力」、「個別の願書等の相談・指導、面接指導」、「論作文指導や模擬授業指導」等、まさに学生の要望にはできる限り柔軟に応じて支援している。その中でも、4年次の学生に関しては、研究室へ入室しての相談や支援としては、時期による多少の違いはあるが、次の5点が最も多いと感じている。1 願書の点検・指導、2 各県の情報確認や詳細について、3 面接練習や論作文指導、4 進路や受験校種の相談、5 個人的な悩み相談、である。

②教職自主サークルの活動への支援

学生は「教職自主サークル」と呼ばれる教員採用試験に向けた自主的な活動を前期4月から7月、後期10月から2月[※]と、毎週月曜日の18:00～19:30まで、教員採用試験に向けて計画を立てて運営している。この活動には教員を志望する学生が多く参加しており、学生同士で研鑽する場となっている。交流人事教員は、学生から依頼を受けてオブザーバーとして「集団討論」「模擬授業」「ロールプレイ」の講義を行う他、学校現場での経験を踏まえた助言を行うなどしてサポートしている。学生の意欲や成長ぶりに、私たち教員が感動できる時間でもあり、教員採用試験にとらわれることなく、教育課題をどうとらえるか、問題にどう対応するかなど学生の考え方に対して、教員としての心構えを感得させるべく助言を行っている。

(3) 委員会等の役割分担

学部内における各種委員会における役割分担として、以下のように1年目から3年目の教員において分担している。

- 1年目教員担当：フレンドシップ実施専門委員会、
- 2年目教員担当：教育実習実施専門委員会、
- 3年目教員担当：学生支援専門委員会
- 3名全員：生活科実施専門委員会、未来からの留学生アドバイザー
- その他：わくわくコンサートアドバイザー、きょうから音読名人 等

(4) その他の関わり

授業や委員会以外にも行事やイベント等への多様な関わりとして、下記のような活動に協力してきた。その中でも「きょうから音読名人」について概要を述べる。

学生企画イベント「きょうから音読名人！」のサポート

学生約60名のスタッフで企画運営を手掛け、県内の小学生41組45名(平成24年度)が香川大学の講堂の舞台で音読し、練習の成果を披露した。発表の間には学生による「うばすて山」(菊池寛作)の音読劇も行っている。音読を通して子どもたちの国語学習に対する意欲を高め、県下の音読活動のさらなる活性化も目指している。学生企画イベントの「きょうから音読名人！」は、平成25年度で7回目を迎える。県教委主催の音読カップに挑戦する子どもたちも含めた県内小学校から大勢の児童が参加を希望してきた。プレイベントとして「未来からの留学生」で学生が行った音読の指導も県教委主催の音読カップ審査員研修の言語活動指導力向上研修に参加させていただくことで、好評を得ている。

就職セミナー・就職ガイダンス：学務係、学生支援委員会の依頼を受け協力

就職インターンシップ：ガイダンス等の担当、学生への具体的な指導

教職自主サークル：11年目、月曜日午後6時から、学生主体の教員採用試験対策の支援

大学周辺清掃ボランティア：約10年、地域の方との清掃活動への参加呼びかけ等の協力

オープンキャンパス(学生指導)：教育学研究室の学生主催企画への支援

未来からの留学生：「音読教室」「毛糸であそぼう!」「折り紙、切り紙で遊ぼう!」講座担当

実践総合センター研究プロジェクト：2つの研究プロジェクトに参加協力

プロジェクト①「教育実習を軸とした4カ年を見通した実地教育プログラムの改善に関する研究」、

プロジェクト②「教職を目指す学生への支援体制の構築に関する研究」、

松楠会(卒業生の会)学内理事：総会や各郡市ごと開催の支部会に参加



写真 学生による音読劇の発表



写真 未来からの留学生

それ以外にも、教研合宿への参加、花植えボランティア、学生ボランティアの紹介や幹旋、大学祭・ミスキャンパスの審査委員等の協力や支援をできる限り行ってきた。

5 全国の交流人事制度に関する状況

(1) 広がり多様性

各大学における交流人事教員の実践を交流する会として「交流人事教員交流会」を香川大学教育学部で平成17、18年度に開催した。その後、第3回以降を山口大学の霜川氏に事務局的な世話人をお願いすることとなった。その際に香川大学以外は実践センターの所属であったので、実践センターのメーリングリストを活用し、情報伝達や共有を図ってきた。その後、全国教育系大学交流人事教員交流研究集会として平成25年度の第9回まで継続してきた。全国のつながりや交流は、各大学の交流人事教員に大きな影響力を与えている。現在では、約30の大学でこの制度を取り入れている。任期に関しては、和歌山大、琉球大のような2年間から千葉大学の5年間まで様々であるが、最も多いのが3年間である。また、人数においては1名配置が最も多く、最大は鹿児島大学の4名である^{xy}。

表2 全国教育系大学交流人事教員交流研究集会の開催状況

回数	年度	開催大学	主な動き等
第1回	平成17年度	香川大学教育学部	他大学でも制度採用
第2回	平成18年度	香川大学教育学部	香川大で交流人事教員1名が交代
第3回	平成19年度	山口大学教育学部	メーリングリストを開設
第4回	平成20年度	千葉大学教育学部	現場復帰者も参加
第5回	平成21年度	京都教育大学	霜川会長就任
第6回	平成22年度	筑波大学教育学部	授業参観も設定
第7回	平成23年度	佐賀大学教育学部	九州で初の開催
第8回	平成24年度	大阪教育大学	現在の会の名称に変更
第9回	平成25年度	秋田大学教育文化学部	前教育長の講演

(2) 実務家教員として～教職大学院における活躍～

今後、中教審の24年8月答申でも提言された教職大学院制度の発展・拡充により、全国の全ての都道府県に設置を推進することとなれば、交流人事教員に対して教職大学院での活躍も期待される。さらに、本答申では、「学び続ける教員像」の確立が必要であるとされているが、同時に教育

委員会と大学との「連携・協働」による教職生活全体を通じた、一体的な改革「新たな学び」を支える教員の養成が不可欠であることが明記されている。

例えば、山梨大学や岐阜大学で勤務している交流人事教員が、教職大学院の実務家教員として活躍しているが、他大学における教職大学院の実務家教員の役割を見ると、附属学校だけでなく公立学校での実習を受け入れる地域連携協力校との連絡・調整、県教委・市町教委とのパイプ役、学校現場における具体的な課題等を取り入れた授業の構想等、数限りなく示されている。そのような点からも、今後の交流人事教員の役割は教職大学院の設置拡大と大きく関連してくる。学部における教員養成だけでなく、教職大学院における実務家教員としての働きに関する情報交換や共有を推進していくことも重要な課題である。特に、教職大学院での実務家教員については、一定期間で替わっていくことが望ましいと報告^{vii}からも指摘されている。その点からも交流人事教員が教職大学院における実務家教員としての活躍が期待される。

6 まとめ ～10年を振り返り～

交流人事教員の役割について、植田(2007)は試行錯誤の中で4年間取り組んできた過程から以下の5点を指摘していた。

- ① 学生の実践的指導力の育成に資する多様な場面に積極的に関わる
- ② 現在の学校現場に対応できる授業内容の開発とよりよい改善
- ③ 公立校等の学校現場とのパイプ役・コーディネート役を様々に果たす
- ④ 学生が何でも相談できる雰囲気と環境づくりに寄与する
- ⑤ 授業外における多様な支援体制を構築する

特に③のパイプ役を果たす中で、多様な連携の形や大学と公立校の両方にとって様々な効果があることも感じていた。また、④や⑤に関しても、3名が教育実践として所属していたが、他の講座の学生や他学部生であっても、気軽に何でも相談できる雰囲気と環境づくりに努めており、学校現場へ連絡を取り、協力を依頼することも多々あった。また、教職自主サークルの結成による支援、学生の自主的な自治的活動への協働や支援、採用試験の勉強会でのアドバイスなどである。そのような支援を通して、学生の自主性と社会性を育成することにも寄与できると考える。

以上5点示したが、最も重要だと感じていたことは3名の交流人事教員が目的を共有することである。そして、各々の校種や教科等の専門性を生かしながら、役割分担をすることである。さらに、学部内の教員とも多様に授業に関わる過程を通して、目的を共有し、役割分担をして、互いに教員養成に関わる責任を自覚しなければならないと考える。

交流人事教員は、勤務年数に応じて仕事や授業の役割分担をするなど、見通しをもって大学での任務に取り組めるようにシステムを改善し引き継いできた。原則3年間という限られた任期であるが学生との触れ合いや一人一人への具体的な支援を大切に考えてきた。また、講義や演習等のどの授業においても、多様な支援・工夫を取り入れている。そのような学校現場でも生かせる教育方法や具体的な技術^{viii}を場面に応じて伝えていることで、より一層親しみを感じている学生も多くいる。つまり、これらのことは学生と教員との垣根を低くして、いつでも相談を受けやすい体制づくりに心がけている表れともいえる。

学生は、このような交流人事教員を通して小・中学校教員の雰囲気を感じ取っていると思われる。交流人事教員が学校現場の様子を具体的に語ることで、教員の魅力や責任の重さを自分なりに捉えることができるので、今後もしっかりと伝えていかなければならない。

さらに、学生は子どもたちとの触れ合いを求めているので、小中学生と触れ合えるボランティアを紹介したり、授業参観や引率実習等を意識した授業づくりをしたりすることにも努めていき

い。また、悩みごとを抱える学生の個別相談等で交流人事教員の研究室を訪れる学生は多い。教職支援にもより一層充実を図りたい。

教員の大量退職、大量採用の時代を迎えているからこそ、実践力のある、学び続ける姿勢をもった、精神的にもタフな学生を育て、学校現場で活躍してもらうために、大学の他の先生方と共に、これからも魅力のある教育活動を展開していきたい。

注

ⁱ 香川大学教育学部と香川県教育委員会との間で協定書が結ばれ、全国初の交流人事制度がはじめられた。前例のない人事であったため、様々な声があった。研究室の配置、研究費や旅費の配分等については、正規教員と同様に対応。

ⁱⁱ 平成15年度は香川大学のみで、その後平成17年度から千葉大学、静岡大学、山梨大学、鳴門教育大学などが取り入れたので、平成17年度に香川大学教育学部が事務局として他大学に呼びかけた。平成17年度に第1回、平成18年度に第2回を香川大学教育学部で開催した。

ⁱⁱⁱ 学校教育基礎コースは、それまで教育領域と心理領域であったが、教育実践領域はその2つにまたがるように位置付けられた。

学校教育基礎コース	
教育領域	心理領域

平成15年3月まで

学校教育基礎コース	
教育実践	
教育領域	心理領域

平成15年4月から

^{iv} 平成14年度の香川県教育委員会と香川大学教育学部の間に連携協議会が発足し、現在まで毎年定期的に開催され、連携の成果や状況について実績報告書としてまとめられている。

^v 植田和也 2007「教員養成における交流人事教員の役割と課題～実践的指導力の育成をめざして～」日本教育大学協会研究年報第25集 pp.123-135

^{vi} 現職教員の会として、情報交換を中心に、学部への相談事項、各種委員会やプロジェクトへの所属、学務委員会等の情報共有等について毎月定期的に行っていた。

^{vii} 2003年5月19日及び6月9日に香川大学学生293名（2年130名、3年130名、4年33名）対象にアンケート調査を実施した。ここでは選択教科ではなく、卒業認定に必要な科目として好むと好まざるとに関わらず受講しているといった学生も対象であり、より明確な回答が期待された。この調査は、当該講座から、現場の状況を学生に講話して欲しいとの依頼があった授業において、始めに担当教員から簡単な紹介（派遣されていること）をいただき、その後30分ないし60分程度現場教育について講話を行った時に実施した。

調査当時、交流人事に対して認識していた学生は17.4%であったが、約97%の学部生に歓迎するといった回答が得られた。調査結果については、当時の3名で作成していたHPに「交流人事成果報告」として掲載し情報発信していた。

^{viii} 生活科研究は、1年目の教員が前期に15回全てに関わるが他の教員とのコラボレーションであり、一人で全ての負担を背負うことはない。

^{ix} 「小学校英語指導法」では、外国語活動の実際を学生がイメージし、その求められている目標や内容を理解することを第一の目的とし、ALTに実地指導講師を依頼し、『Hi, Friends!』を活用した模擬授業を行っている。小学校の教員にとって必須の領域として、小学校教員志望の学生たちに対応できるように、授業内容をさらに改善しているところである。

^x これらの主担当の3授業は交流人事教員により新設された。交流人事教員A男が平成15年度に中学校用として「授業実践論B」を、平成16年度に「教育法規入門」を新設、交流人事教員B男が平成15年度に「生活科授業研究」を、平成16年度に小学校用として「授業実践論A」を新設、交流人事教員C男が総合的学習論を新設し

た。

- ^{xi} 平成25年度から必修で4年生後期に設定され、交流人事教員は重要な役割を担っている。
- ^{xii} 附属教育実践総合センターの研究プロジェクトで、教職支援を①教員採用試験に関することから、②教職に関する悩みや相談への対応、③教職への志望動機を高めること、として捉えて一層の充実を求めて協議中である。平成26年度は、情報提供の充実等により、他学部や他の課程への支援の充実や相談体制の整備を検討し、できるところから施行する予定である。
- ^{xiii} 交流人事教員や学生支援委員会以外の環境施設面として、就職資料室も有効に活用されている。植田は意図的に教採関係の資料を就職資料室にも置いてみた。就職資料室には、教職関係資料や就職試験対策雑誌の閲覧や貸し出し、各県の採用試験情報の提供、映像関係の視聴、就職対策資料の提供など以外にも冷房が使えるので夏の学生自習室としての役割も果たしている。
- ^{xiv} 10月末からは、3年生が4年生から引継ぎ実施している。
- ^{xv} これらの詳細は、平成25年度秋田大学において開催された全国教育系大学交流人事教員交流研究集会で調査の途中経過報告をされた山口大学 霜川正幸、千葉大学 佐瀬一生 の共同チームで昨年度調査している教育委員会と大学・学部間の「交流人事教員」に関する実情調査による。ただ、協力できていない大学や返答のない大学もあり、詳細は現在取りまとめ中である。
- ^{xvi} 一例として、出欠表やワークシート等に赤線や丸、コメント等を個別につけて返却したり、授業中になるべくグループワークを取り入れたりして机間指導を実施している。
- ^{xvii} 教員の資質能力向上に係る当面の改善方策の実施に向けた協力者会議報告書「大学院段階の教員養成の改革と充実等について」2013年10月15日 実務家教員 p23

参考文献、参考資料

- ・中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」平成24年8月28日
- ・阪根健二・大西孝司・植田和也 現場教員による交流人事についてHPによる「成果報告」
<http://www.ed.kagawa-u.ac.jp/~kouryuu/kinnkyou2.html> 2005年
- ・阪根健二・大西孝司・植田和也 香川大学教育学部の専任教員として～3年目の取組と3年間の総括、今後の展望～平成17年度香川大学教育学部と香川県教育委員会との連携に関する実績報告書 2006年 香川大学教育学部／香川県教育委員会 pp19-25
- ・阪根健二 教職志望学生に対する進路支援の実践について「香川大学教育実践総合研究第12号」2006年 香川大学教育実践総合センター
- ・植田和也 「教員養成における交流人事教員の役割と課題～実践的指導力の育成をめざして～」日本教育大学協会研究年報第25集 2007年
- ・植田和也 専門職大学院の多彩な形と実務家教員の配置 ～県と大学の連携・交流の取り組みから実務家教員の役割について考える～「平成16年度 実践的な教職課程の充実に関する調査研究事業報告書～大学院修士課程における実践的な教員養成カリキュラムの在り方」大学院における教員養成カリキュラムの在り方研究会 香川大学教育学部、85-96頁 2005年3月
- ・全国教育系大学交流人事教員交流研究集会発表資料2013年 ① 霜川正幸、佐瀬一生 山口大学・千葉大学共同チームでの調査「教育委員会と大学・学部間の「交流人事教員」に関する実情調査」②谷本里都子「香川大学教育学部 活動状況報告」、③植田和也、谷本里都子「香川大学における教職支援～交流人事制度10年間を振り返り～」
- ・大西えい子 「教員養成に係る交流人事教員の取り組み」2013年度 日本教育大学協会四国地区研究集会「高知集会発表論文集」2013年

参考資料

★香川大学学生企画イベント★
第7回 目指せ！音読マスター！
きょうから音読名人！
音読発表会
 平成25年11月17日(日)
 開場/12:40 開演/13:30~17:00
香川大学 講堂
※駐車場がありませんので、
 公共交通機関をご利用ください。

学生スタッフによる音読劇
 大学生による音読劇があるよ！
 『積豆合戦』菊池寛・作
 みなさんを音読劇の世界へ
 ご案内します。
 ぜひ見てください。

子どもたちによる音読発表会
 男に限定して聞かせるだけでも
 無料でご覧いただけます！
 友だちをたくさんごまかして
 きてくださいね！
 最後は一斉音読もあるよ！！
 前半：13:30~
 後半：15:00~

音読教室3回
 3回の音読教室に参加して、
 音読に癖をきかそう！

音読教室
 (第7回「きょうから音読名人！」イベント)
 教育実習生・学生スタッフによる「きょうからの音読」の講座の一つです。
 ①平成25年10月13日(日) 13:00~14:00
 ②平成25年10月26日(土) 13:00~15:00
 ③平成25年11月10日(日) 13:00~15:00
 香川大学教育学部内 6号館 611教室

★準備物
 11月17日(日)の「音読発表会」に読む予定の本や辞など
【申込】香川大学教育学部学生課 610号館
 (申込受付時間:平日9:00~17:00)

主催：香川大学「きょうから音読名人！」実行委員会 共催：香川大学教育学部学生連絡ネットワーク(SLN)
 後援：香川県教育委員会、高松市教育委員会、香川県PTA連絡協議会、高松市PTA連絡協議会

きょうから音読名人チラシ

かんたん ボランティア
 朝の清掃 してみませんか？



毎週火曜日 朝 7時30分 教育学部の東門で待ってまーす。
 汚れてもいい格好でね！(じゅーじがベスト)

大学周辺のボランティア清掃の呼びかけ

教職自主サークル

2013年 4月 15日(月)

○後期活動内容(仮)

- 1 日時 毎週月曜日18:00~19:30
- 2 場所 811教室(8号館)
- 3 活動 ロールプレイ、集団面接、集団討論などの就職試験対策
 大西えい子先生、池西都広先生、谷本皇都子先生の講話 等
- 4 日程(予定)

4	15	第1回 ガイダンス・履修記入についての講話(大西先生)
	22	第2回 願書・集団面接
	29	休み(昭和の日)
5	6	休み(振替休日)
	13	第3回 松井先生の講話
	20	第4回 模擬授業についての講話(池西先生)
	27	第5回 模擬授業①
6	3	第6回 模擬授業②
	10	第7回 集団討論についての講話(谷本先生)
	17	第8回 集団討論①
	24	第9回 集団討論②
7	1	第10回 集団討論③
	8	第11回 直前演習①
	15	休み(海の日)
	22	第12回 直前演習②
	29	第13回 (参加者の意見に合わせる予定です。要望・意見をお願いします。)

上記の予定は変更になることがあります。次の週の活動内容については、その日の活動終了後予告します。
 5 その他 体育の実技練習は5月を境に開始する予定にしています。時間は未定です。場所は教育体育館で行う予定です。実技の内容は各都道府県の実技試験となっている種目になります。自分の受けようとしている都道府県がどのように実技試験を実施しているかを把握して、今のうちから練習していきましょう。

教職自主サークル

2013年 10月 9日(水)

○前期活動内容(仮)

- 1 日時 毎週月曜日18:00~19:30
- 2 場所 811教室(8号館)
- 3 活動 ロールプレイ、模擬授業、集団討論などの教員採用試験対策
 池西都広先生、大西えい子先生、谷本皇都子先生の講話 等
- 4 日程(予定)

10	21	第1回 ガイダンス
	28	第2回 教授合格者からのありがたいお話
11	4	休み(振替休日)
	11	第3回 集団討論に向けて(谷本先生講話)
	18	第4回 集団討論①
	25	第5回 集団討論②
12	2	第6回 集団討論③
	9	第7回 小論文対策
	16	第8回 ロールプレイ(大西先生講話)
		冬休み
1	13	休み(成人の日)
	20	第9回 模擬授業に向けて(池西先生講話)
	27	第10回 模擬授業①
2	3	第11回 模擬授業②
	10	第12回 模擬授業③

上記の予定は変更になることがあります。次の週の活動内容については、その日の活動終了後予告します。
 ※内容について
 0-47レ・・・学校現場で想定される場面指導
 例) 朝の会での担任としての話
 模擬授業・・・与えられた課題について1~5分で授業を組み立て、5~10分でその授業を行う。
 集団討論・・・5~8人で与えられた課題について意見を交換する
 例) いじめについて、小学校外活動誌について

教職自主サークルの計画